慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ハイエクの「転換」プロセスについての一考察 : モルゲンシュテルン論文「完全予見と経済均衡」との関係から
Sub Title	Reconsideration of Hayek's 'transformation' process : with focusing on Morgenstern's paper, "Perfect foresight and economic equilibrium"
Author	秋山, 美佐子(Akiyama, Misako)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2003
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.95, No.4 (2003. 1) ,p.769(135)- 785(151)
JaLC DOI	10.14991/001.20030101-0135
Abstract	ハイエクの理論経済学から社会哲学的な自生的秩序論への研究領域の「転換」は、ハイエクが経済分析に伴う知識論についての見解を論理経済学の範囲を超えて追求しようとしたことを意味する。初期ハイエクの景気循環論はミュルダールに批判され、ハイエクは均衡分析に期待や予見の要素を組み込むという研究計画を立てた。しかし均衡分析に完全予見の想定を組み込むことの難点などが認識され、また、1935年のモルゲンシュテルンの論文はその研究計画に決定的に断念を迫るのものであった。 The "transformation" of the area of study by Hayek from theoretical economics to the social philosophy of his theory of spontaneous order meant that he sought to expand his theory of knowledge accompanying economic analysis beyond the scope of theoretical economics. His early study on business cycle was criticized by Myrdal, and thereafter Hayek came up with a study plan that incorporated factors of expectation and foresight into his equilibrium analysis. However, he recognized the difficulty of incorporating the assumption of perfect foresight into equilibrium analysis, and the paper published by Morgenstern in 1935 pressed Hayek to abandon his study plan decisively.
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20030101-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ハイエクの「転換」プロセスについての一考察
―モルゲンシュテルン論文「完全予見と経済均衡」との関係から―
Reconsideration of Hayek's 'Transformation' Process -- With Focusing on Morgenstern's Paper, "Perfect Foresight and Economic Equilibrium" ―

秋山 美佐子(Misako Akiyama)

ハイエクの理論経済学から社会哲学的な自生的秩序論への研究領域の「転換」は、ハイエクが経済分析に伴う知識論についての見解を論理経済学の範囲を超えて追求しようとしたことを意味する。初期ハイエクの景気循環論はミュルダールに批判され、ハイエクは均衡分析に期待や予見の要素を組み込むという研究計画を立てた。しかし均衡分析に完全予見の想定を組み込むことの難点などが認識され、また、1935 年のモルゲンシュテルンの論文はその研究計画に決定的に断念を迫るのものであった。

Abstract

The “transformation” of the area of study by Hayek from theoretical economics to the social philosophy of his theory of spontaneous order meant that he sought to expand his theory of knowledge accompanying economic analysis beyond the scope of theoretical economics. His early study on business cycle was criticized by Myrdal, and thereafter Hayek came up with a study plan that incorporated factors of expectation and foresight into his equilibrium analysis. However, he recognized the difficulty of incorporating the assumption of perfect foresight into equilibrium analysis, and the paper published by Morgenstern in 1935 pressed Hayek to abandon his study plan decisively.

「三田学会雑誌」95巻4号（2003年1月）

ハイエクの「転換」プロセスについての一考察[1]

――モルゲンシュテルン論文「完全予見と経済均衡」との関係から――

秋　山　美佐子

（初稿受付2002年12月2日，
査読を経て掲載決定2003年1月16日）

要　　旨

ハイエクの理論経済学から社会哲学的な自生的秩序論への研究領域の「転換」は，ハイエクが経済分析に伴う知識論についての見解を理論経済学の範囲を超えて追求しようとしたことを意味する。初期ハイエクの景気循環論はミュルダールに批判され，ハイエクは均衡分析に期待や予見の要素を組み込むという研究計画を立てた。しかし均衡分析に完全予見の想定を組み込むことの難点などが認識され，また，1935年のモルゲンシュテルンの論文はその研究計画に決定的に断念を迫るものであった。

キーワード

ハイエクの転換，貨幣的景気循環論，一般均衡理論，完全予見の想定，シャーロック・ホームズのパラドックス，ハイエク知識論

はじめに

ハイエク（1899～1992）の長年にわたる知的経歴は純粋経済理論から社会科学方法論，理論心理学，社会哲学，法哲学，思想史にまで及び，彼の自由主義思想体系を構成している。この中で，1936年の講演「経済学と知識」[Hayek 1937 (1949)] を境として，初期の景気循環論など理論経済学の研究から，後に彼の自生的秩序論を構成する哲学的な問題へと研究領域を変化させたことは，ハイエクの「転換」(transformation) としてB. コールドウェルによって初めて問題提起された [Caldwell 1988]。それは，ハイエク自身が1964年の講演「合理主義の種類」において初めて，自

（1）　本稿は，2002年10月に開催された経済学史学会第66回全国大会（新潟大学）において報告した内容に加筆，修正したものである。その際，飯田裕康名誉教授（慶應義塾大学），池田幸弘助教授（慶應義塾大学），尾近裕幸教授（國學院大学），橋本努助教授（北海道大学），江頭進助教授（小樽商科大学），中山智香子助教授（東京外国語大学）から有益な助言をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。なお，本稿における誤りは全て筆者の責任である。

分の関心が理論経済学から哲学的な問題へと移行したのは「経済学と知識」からであると述べていることにもとづいている。(2)

一般的には，ハイエクの初期と後期の研究は断絶しているとみなされていて，別々に研究されることが多い。また「転換」後，「社会における知識の利用」[Hayek 1945 (1949)] において特に顕著に示されるように，ハイエクが理論経済学研究において経済システムの調整問題への解答を引き出すことを放棄し，問題の解決をすべて価格システムに委ねてしまったことは，ハイエクの均衡分析における経済学研究の後退であるとして，M. デサイ [Desai 1994]，F. ドンゼッリ [Donzelli 1993b]，A. コットレル [Cottrell 1993] らは「転換」以降のハイエクをネガティブに捉えている。

しかし，ハイエクの「転換」プロセスをより詳細に跡付けることによって，ハイエク思想体系の構想に「転換」が果たした役割を明らかにすることができるのではないだろうか。「転換」はハイエクの景気循環論研究に対する P. スラッファや F. ナイトからの批判，ケインズの『一般理論』の影響，また1935年からのハイエクの社会主義経済計算論争への参加などを原因とした，均衡理論に対するハイエクの認識の変化の過程として説明されている。(3) 社会主義経済計算論争が「転換」の契機となったというコールドウェルの問題提起に対して，N. J. フォスは，「経済学と知識」以前の景気循環論研究の中でハイエクが G. ミュルダールの批判に答えた1933年の「コペンハーゲン講義」[Hayek 1935a] に既に「転換」の要素が見られるとして，「転換」はより漸進的なプロセスであったと主張している [Foss 1995]。

本稿ではコールドウェルとフォスによるこの「転換」の説明に対して，先行研究では重視されていない，(4) 完全予見の想定に関する O. モルゲンシュテルン(5)の見解のハイエクへの影響を付け加える

---

(2) ハイエク自身は，1960年代に入って初めて自分の長い知的経歴における「転換」について次のように述べている。「かつてはまったく純粋で厳密な経済理論家であったが，私は技術的経済学から一般に哲学的とみなされるあらゆる種類の問題に導かれた。振り返ってみると，それはほとんど30年前，私にとって純粋経済理論のいくつかの中心的な難点であると思われたことを考察した「経済学と知識」に関する論文からまさに始まったと思われる。その主要な結論は，経済理論の仕事は，どのような個人の知性の中にも集中されないが何千，何百万という様々な個人がもつ分散した知識としてのみ存在する莫大な量の知識を利用する経済活動の全般的な秩序がどのように達成されるのかを説明することであるということであった。」[Hayek 1965 (1967)] pp.91-92.

(3) 「転換」問題の先行研究は，均衡分析に対する認識の変化として説明するものとして①社会主義経済論争による転換説 [Caldwell 1988] [Donzelli 1993b] [Cottrell 1993]，②景気循環論研究による転換説 [Desai 1994] [Foss 1995] [江頭 1999]，また，社会科学方法論上でのミーゼス的先験主義からポパー的反証主義への変化として説明するものとして [Barry 1979] [Hutchison 1981] に整理することができる。

コールドウェルは，ハチソンの「転換」問題研究はハイエク後期の方法論に反証主義的要素を読み込みすぎているとして批判し ([Caldwell 1992])，ハチソンの説に対するアンチ・テーゼとして [Caldwell 1988] を提示した。なお，コールドウェルは後に，ハイエクの「転換」には社会主義経済計算論争以外にも多くの原因が影響したと立場を変えている ([Caldwell 1994])。

ことで，「転換」プロセスをより詳細に理解できることを明らかにしたい。

本稿の概略は以下のようになる。初めハイエクは，一般均衡理論を前提とした貨幣的景気循環論を静態理論に組み入れることができると考えていた。それがミュルダールによって批判されたことにより，その景気循環論に期待や予見の要素を入れて再定式化するという研究計画が設定された。しかしハイエク自身が均衡分析に完全予見の想定を組み入れることの難点などを認識していく過程で，1935年のモルゲンシュテルンの論文「完全予見と経済均衡」に，ハイエクの今までの研究計画に決定的に断念を迫る見解を見出したと考えることができる。ハイエクはこの過程で生じた，経済分析に伴う知識論についての見解を理論経済学の範囲を越えて追究しようとしたため「転換」に至り，それは景気循環論の新たな研究計画の設定と，ハイエク知識論の深化につながった。

最近のハイエク研究において，ハイエク知識論がその思想体系において果たす中心的役割についてのコンセンサスが高まりつつある。それは利用できる情報が社会に分散した形で存在し，価格が情報の伝達者としての役割を果たすというものであり，現代オーストリア学派，情報の経済学，市場社会主義者などに受け入れられている。これは市場プロセスによって諸個人の期待を一致させる秩序化作用を利用すべきであるという後の自生的秩序論と結びつくものである。現代オーストリア学派においてはハイエク知識論は彼の社会主義経済計算論争への貢献との関連で議論されることが多いが，(6) 本稿ではハイエクの「転換」につながる景気循環論研究において，その形成，発展の萌芽が見られることを主張したい。

（4） [Zappia 1999] は，「転換」について明示的に述べたものではないが，1930年代におけるハイエクとモルゲンシュテルンの「論争」が，「ハイエクが知識の獲得と発見の機能としての市場プロセス理論に転換することを引き起こした原因のうちの一つであろう」と述べている。また，[Steele 2001] は，ハイエクの「競争の意味」(1946) がモルゲンシュテルンが提出した「シャーロック・ホームズのパラドックス」に言及していることを指摘しているが，本稿では，それよりも前に見られるハイエクへのモルゲンシュテルンからの影響が重要であることを主張したい。なお，「競争の意味」における「パラドックス」への言及は本稿注15の引用を参照のこと。

（5） モルゲンシュテルンはハイエクと共にオーストリア学派の第四世代に属し，ミーゼスの私的ゼミナールに参加していた。彼らはウィーン大学の私講師時代，ハーバラー (Gottfried Haberler) も加えた三人で生産理論に関する共同のゼミナールを開くこともあった。1931年にハイエクが L. S. E. の招聘教授としてイギリスに渡る時，彼はオーストリア景気循環研究所所長の地位をモルゲンシュテルンに譲った。

（6） cf. [Kirzner 1992] [Lavoie 1985a] [Lavoie 1985b] 現代オーストリア学派はハイエクの「社会における知識の利用」(1945) を引用し，利用できる情報が社会に分散した形で存在するという前提において生じる，社会の個々の構成員だけがその相対的重要性を知っている諸目的に対して，彼らが知っている資源の最良の利用をいかにして確保するかという経済問題を，「ハイエクの知識の問題」(Hayek's knowledge problem) と呼んでいる。

1．景気循環論の研究計画（1）

『貨幣理論と景気循環』[Hayek 1929] に示されるハイエクの貨幣的景気循環論は，初期均衡状態が銀行制度のもとでの貨幣流通量の弾力性によって撹乱されることにより生産構造が変化し，景気の循環的変動が生じるというものである。

初期均衡状態においては，均衡理論によって示される経済的相互関係，すなわち経済システムの様々な部門の均衡を保つ需要と供給の自動調節メカニズムが働いていると想定されている。新発明や新発見など何らかの原因によって資金需要が増加すると，ある一つの商業銀行において信用創造が行われる。その供与された信用が他人の勘定に転記され，そして現金では引き出されない……ということが繰り返されると，一国の銀行制度全体の貸し出し能力が増大する。そして追加的な資金需要がその時の貯蓄の累積額を超えると，均衡利子率が貨幣利子率以上に上昇する。銀行は均衡利子率に比例して貨幣利子率を引き上げず，それまでの水準で貸し続ける。生産の改善と拡張という好況がもたらされるが，貨幣利子率と均衡利子率の乖離は個別価格関係に相対的な変化をもたらし，それは資本財生産部門と消費財生産部門に均衡配分とは異なる生産資源を配分することになる。貨幣流通量を増加させ続けないと維持し続けられないような生産構造がつくられているため，銀行が追加的な信用創造を止めることによって恐慌が発生するのである。

ハイエク初期の景気循環論においては，完全予見を前提する異時点間均衡概念が採用されていた[Hayek 1928 (1984)]。つまり，経済主体の予見能力を前提して，異時点間の同種商品の需給の均衡を，同一時点での異なる商品の需給の均衡と同様に均衡理論上で扱いうるとしていた。信用創造による貨幣的撹乱によって人々の完全予見という前提が崩され，貨幣が中立的でなくなり，景気変動が起こると考えたこの時期のハイエクにとって，均衡概念と完全予見の想定とは切り離せないものであった。

またハイエクは貨幣的要因が実物経済過程に及ぼす影響を問題としたため，景気循環論の完成のためには，静態理論が仮定する条件下では不可能であるような運動を記述できる貨幣経済理論の精緻化が必要であると考えた。しかしハイエクは，静態分析の方法こそ経済理論にとっての唯一利用可能な道具であると考えていたため，最終的には「景気循環論を全ての理論経済学の基礎である静態理論に組み入れることができる[(7)]」と考えていた。またハイエクは当初，「景気循環論――ベーム・バヴェルクが，しばしば引用されながら決して感銘を与えることのなかった文章の中で表現したように――こそ，完全な社会科学の最終章を構成すべきものである[(8)]」という構想をもっていた。

（7） [Hayek 1929] pp.97-98, 訳42頁.
（8） [Hayek 1929] p.131, 訳57頁.

2．景気循環論の研究計画（2）

『価格と生産』［Hayek 1931］は，オーストリア資本理論による生産構造論を用いて，貨幣的景気循環過程を説明するものである。すなわち，完全雇用，遊休資源の不在，完全伸縮的な価格が仮定された初期均衡状態が設定され，それが相対価格の変化によって景気循環がいかに内生的に生成されるかということが詳細に説明された。

それゆえ，定常的均衡概念に基づいた景気循環論である『価格と生産』はミュルダールの論文「貨幣理論分析の道具としての均衡概念」［Myrdal 1933］において，「不確実性の要因や期待の要素を全く組み込むことができない理論体系である」として批判された。ミュルダールは次のように述べている。

「ハイエクの著作はケインズのそれと比べて，迂回生産とそれゆえ収益性の問題をより徹底的に分析しているという功績をもっていると思われる。しかしハイエクの分析は全く定常的あるいはほとんど定常的なものであり，私は彼が危険や期待の要素を，簡単に放棄しえない非常に抽象的な諸仮定によって拘束されている彼の体系にどのように組み込むことができるのかわからない。ケインズの分析はそれにもかかわらずより普遍的であることを意図している一方で，ハイエクは，オーストリア学派的伝統に従って，完全な分析のための基礎となる諸仮定から期待の要素などを排除してしまっている現実離れした事例を詳細に分析している。……すなわち，彼らの分析の理論的な問題の発展には変化する要因や，危険に拘束されている将来の変化についての期待のための余地がないということである。(9)」

フォス［Foss 1995］の研究は，ハイエクが一般均衡理論と景気循環論の動態的な現象を調和させようとした長い苦闘において彼の「転換」を理解すべきであるというものである。フォスは，経済理論は期待の動学と知識の伝達に焦点をあわせるべきであるという「経済学と知識」(1936) における論点は，景気循環論に関するハイエクの熟考に最初の起源を見出すとして，『価格と生産』に対する1933年のミュルダールによる批判がハイエクの「転換」の契機であると説明している。(10)

---

(9) Myrdal［1933］p.385.

(10) フォスは，ハイエクの「転換」に影響した可能性があることとして他に，(1)「資本の維持」(1935) に現われた完全予見の想定に対する疑問，(2)「経済学と知識」の議論を先取りしている，当時 L. S. E. の学生だったニコラス・カルドアの1934年の論文「静学的均衡の決定」(「経済学と知識」はこれに言及している）を挙げている。しかし，完全予見の想定に疑問をもったことにモルゲンシュテルン論文が影響していることには触れていない。

ミュルダールの批判に対してハイエクは1933年の「コペンハーゲン講義」である「価格の期待・貨幣的撹乱・および不適切な投資」[Hayek 1935a] で，景気循環論において「期待が果たす役割がいかに重要かを示すことがこの講義の目的である」ので，ミュルダールによる批判には「まったく同意できない」と述べている。(11) 以下に見るように，ハイエクがこの講義から，それまでの均衡理論を前提とした景気循環論に「期待（＝予想）(expectation, anticipation)」や「予見 (foresight)」の要素を入れて再定式化しようとしたことを，景気循環論の研究計画の変更と捉えることができるだろう。

ハイエクは企業家のグループと消費者のグループの期待が一致する場合と，一致しない場合とに分けて考察した。期待が一致する例は，資本市場においては，資本の現在供給量と利子率の現在水準がある期間継続するであろうという期待のもとで行われる投資である。

企業家と消費者の期待が一致しない場合は，消費者が所得を消費と貯蓄とに配分する意向が，企業家が資源を消費財生産と資本財生産とに配分する意向と一致しない場合として説明される。それは，「消費者が自らの意向を十分強調的に表明する可能性が全くない場合」すなわち信用創造に伴って資本市場の歪みが発生した場合に原因が求められる。すなわち，企業家が均衡利子率以下になった貨幣利子率と，十分な貨幣資本という指標をもとに資本財生産設備の拡張を始めた場合に「不適切な投資」が引き起こされ，この場合に景気循環が起こると説明された。

またハイエクは均衡分析を動態的現象を説明しうる理論装置とするために，均衡概念をより正確に定義しようとする。

「将来に対する人々の態度についてのまさに明確な仮定を設定しなければならないということがはっきりしてきた。均衡概念に示されるこの種の仮定は基本的には，どのような人々も将来を正確に予見し，その予見も客観的与件の変化だけでなく，彼が経済取引を成立させようとする他の人々全員の行動をも対象にしていることである。(12)」

ハイエクはやはり完全予見に近いものを想定していた。ハイエクは，ミュルダールの見解に従えば伝統的な均衡分析で動態的現象を説明しうると考えていたのである。そしてこのように均衡概念を定義するにあたって，彼は，「特に経済体系全体，またはある財の価格，また同様に利子率が均衡状態にあるか否か，といったしばしば行われる主張についてこのことを考えている(13)」という研究計画を示している。ハイエクは次のように述べている。

---

(11) Hayek [1935a] p.155, 訳121-122頁.
(12) Hayek [1935a] pp.139-140, 訳110-111頁.
(13) Hayek [1935a] p.140, 訳111頁.

「おのおの異なる個々人が，ある特定の時点で決定を行う際に根拠とする種々の予想は，相互に整合的であったり，なかったりすることは明らかである。……ある特定の時点に存在する期待は，その時点に存在する価格水準にかなりの程度依存するし，また失望が必然的に運命付けられているような期待を作り出す無数の価格を考えることもできるし，あるいは失望の発生を許さないような，少なくとも外部環境には予測できない変化はないとして，実際の事のなりゆきと調和するような期待を作り出す他の無数の価格を考えることもできる。[(14)]」

つまり，この時ハイエクは景気循環論の範囲内で期待や予見の要素を考察しようとしていたため，期待や予見の一致・不一致をもたらすものは，財の価格や利子率の水準であると考えていたのである。

3．モルゲンシュテルン論文の影響と研究計画（2）の断念

モルゲンシュテルンの1935年の論文「完全予見と経済均衡」[Morgenstern 1935（1976）]は，均衡分析の理論的完全性は経済主体と企業家による完全予見の想定がなければ達成し得ないという当時普及していた見解を批判するものであった。彼は，均衡理論ではあらゆる経済的出来事が相互依存しているため，不可能なほど高度な要求が経済主体の予見に帰せられなければならないことを「シャーロック・ホームズのパラドックス[(15)]」を用いて説明し，完全予見の想定の論理矛盾を指摘する。

「完全予見の要求が満たされる場合には，この均衡体系には一般の人間ではなく，まさに半神半人に等しいようなものが含まれているということを示すのである。……もし『十分な』あるいは『完全な』予見が厳密に明示された意味で均衡理論の基礎を提供すべきであるなら，そして明らかに経済学の著者たちによってその意味が意図されているのなら，完全に意味のない想定が考慮されたということになる。もし予見の完全性が達成されないようなやり方でその範囲が導入されるなら，その範囲はかなり厳密に述べられなければならない。……理論経済学者がこのディレンマからのがれる方法はない。[(16)]」

「ここに解決できないパラドックスがあることが容易に確信できるだろう。……常に相互の推測上の反応とその逆の反応の果てしない連鎖が示されるのである。この連鎖は知識に基づく行為

(14)　Hayek［1935a］pp.140-141, 訳111頁.

からは決して断つことができず，常に任意の行為，すなわち決断を通してのみ断つことができる。……このため際限のない予見と経済均衡とはお互いに両立しない。[17]」

---

(15) 「シャーロック・ホームズは彼の宿敵モリアーティに追われ，ロンドンを離れてドーヴァーに向かった。列車は途中の駅に停まり，彼はドーヴァーまで行かないでそこで降りた。彼はモリアーティを［ロンドンの］駅で見かけていて，モリアーティは大変賢いことを思い出し，モリアーティは彼をドーヴァーで捕まえるためにより早い臨時列車に乗るだろうと予想する。ホームズの予想は結局正しかったということがわかる。しかし，もしモリアーティの方が更に賢くて，ホームズの知力を推測していて，ホームズの行動をそれに応じて予見していたら，どうなっていただろうか。そうすると，明らかにモリアーティは中間の駅まで行っただろう。ホームズは更にそのことを計算していて，彼自身はドーヴァーまで行くことに決めただろう。そうするとモリアーティは更に違った『反応をした』だろう。非常にたくさんのことを考えたために，彼らは全く行動することができなかっただろう。あるいは二人のうち知的により劣った方が，列車での移動全体が無駄になったため，ヴィクトリア駅でもう一方に降参しただろう。この種の例はどこからでも引き出しうる。」（[Morgenstern 1935（1976）] pp.173-174.）

「シャーロック・ホームズのパラドックス」は既に1928年のモルゲンシュテルンの初期の著作『経済予測』（[Morgenstern 1928] p.98.）に現われている。ハイエクは『貨幣理論と景気循環』（1929年）でこの著作に言及しているのであるが，それはモルゲンシュテルンが「予測に正当化しうる以上のものを要求して」経済予測の可能性を絶対的に否定していることを批判する文脈においてである（[Hayek 1929] p.36n, 訳111頁.）。筆者は，ハイエクが「シャーロック・ホームズのパラドックス」を完全予見の想定の論理矛盾を意味するものとして強く意識するようになったのは，「景気循環論の研究計画（2）」以降，完全予見の想定など均衡分析に対する熟考を経た後に，モルゲンシュテルンの1935年の論文のインパクトを受けてからであると考える。

ハイエクは1946年のプリンストン大学での講演「競争の意味」でモルゲンシュテルンの1935年論文に言及して次のように述べている。「真に完全な知識と予見とは，すべての行為に対してそれを麻痺させる効果を持つであろうというよく知られた逆説には，ここでは立ち入らないでおこう。すべての人がすべてのことを知っていると想定しても何も解決されないこと，そして現実の問題はむしろ，利用可能な知識ができるだけ多く利用されるということをどのようにして実現できるかということであるのは明らかである。」（[Hayek 1946（1949）] p.95, 訳131頁.）この部分から，モルゲンシュテルンの1935年の論文が「ハイエクの知識の問題」につながっていることがわかる。

なお，「シャーロック・ホームズのパラドックス」は，後のゲーム理論においては次のように説明された。ホームズとモリアーティは，ドーヴァーまで行く，あるいは途中下車するかの戦略の組み合わせにより，それぞれが四種類の利得をもつことになる。それぞれがどの戦略を採っても，両者の利害が相反するゼロ和ゲームである。この場合，ホームズとモリアーティが共に相手がどう考えるかを考えて自分の行動を決定するとすれば，最適な単純戦略は存在しないことになる。しかし，二人が確率による期待効用にもとづいて意思決定を行うという混合戦略を採り，一方のプレーヤーの混合戦略が他方のプレーヤーの混合戦略に対する最適反応となっている時には，理論的に均衡点を求めることができ，最適戦略が得られる。このようにして，ゲーム理論的には期待効用関数を解くことによって「パラドックス」は解消するとされた。（鈴木光男著『ゲーム理論入門』共立出版，1981.参照）

(16) ［Morgenstern 1935（1976）］p.173. モルゲンシュテルン論文からの引用文は，ドイツ語の原文を参照して，1976年版の英訳から邦訳したものである。

(17) ［Morgenstern 1935（1976）］p.174.

この論文で，均衡分析と完全予見に対するヒックス，ナイト，フィッシャー，ケインズなど同時代人の見解が批評されるのだが，その中で，第2節で取り上げたミュルダールの論文と並んでハイエクの「コペンハーゲン講義」が批判される。

「[均衡] 理論に期待の要素を導入することは，もし期待の概念が定義されることなく使われているのなら，その理論の進歩を認める著者たちによって理解されているよりも根本的により困難なことである。私はここで，例えばミュルダールの「貨幣理論分析の道具としての均衡概念」を想定している。そこでは予想がどのように導入されているのか，予想を決定するものは何か，などという分析がなされていない。また，予想と期待が一致しなければならないということが全く証明されていないのであるが，しかし私はここでこれらのより広い困難に立ち入りたくない。この関係から言及されるであろうもう一人の著者は，ハイエクである。彼がジェヴォンズ-ヴィクセル的投資関数の概念を適用するためと，実際はそれはパラドックスをもたらすとしても，完全予見によって均衡概念は解明しうるという見解を彼がもっているためである！[18]」

モルゲンシュテルンはミュルダールについては，「予想がどの点で導入されているのか，予想を決定するものは何かなどという分析がなされていない，また予想と期待が一致しなければならないということが全く証明されていない」と批判した。このことは，ミュルダールの見解を受け入れていたハイエクに対する批判にもなると考えうる。

「コペンハーゲン講義」については，第2節の引用箇所で示した，ハイエクが均衡概念を正確に定義しようとした部分が取り上げられ，モルゲンシュテルンが論理矛盾であるとした完全予見が想定されているとして批判された。

「ハイエクは，[伝統的な] 均衡理論は時間の要素を捨象することによって組み立てられてきたため，予見の要素が含まれていないと考える。すなわち，『伝統的接近法の主要な難点は，時間を完全に捨象したことである。……時間的要因を全く無視するのではなく，将来に対する人々の態度についてのまさに明確な仮定を設定しなければならないということがはっきりしてきた。均衡概念に示されるこの種の仮定は基本的には，どのような人々も将来を正確に予見し，その予見も客観的予見の変化だけでなく，彼が経済取引を成立させようとする他の人々全員の行動をも対象にしていることである。……我々の多くが漠然と使用してきたある種の概念に対して，この新しい角度からより明確な意味付けをすることが，少なくとも可能になってくるべきだということが明らかになった。特に経済体系全体，またはある財の価格，また同様に利子率が均衡状態にあ

(18) [Morgenstern 1935 (1976)] p.179n.

るか否か，といった景気循環論でしばしば行われる主張についてこのことを考えている。』と述べている。」[強調はモルゲンシュテルンによるもの][19]

モルゲンシュテルンに批判された「コペンハーゲン講義」の均衡概念の定義をハイエクは後に「経済学と知識」(1936) において修正するのであるが，それは第4節で述べたいと思う。

モルゲンシュテルンが，完全予見の想定は「相互の推測上の反応とその逆の反応の果てしない連鎖」を必要とし，その連鎖は「知識に基づく行為からは決して断つことができない」と述べていることは，ハイエクがこれまで均衡分析上，推し進めようとしていた研究計画の否定につながるものと考えられる。ハイエクはこの時に，第2節の「均衡が達成されるために必要とされる人々の予見，期待に必要な知識」として，「ある財の価格，利子率が均衡状態にあるか否か」ということを考える研究計画を断念せざるを得ないことを認識したと考えることができるだろう。

ハイエクはモルゲンシュテルンの論文と同じ年の論文「資本の維持」[Hayek 1935b (1939)] において，ついに完全予見の想定の限界を認識する。彼は「不変量の資本」の概念を考察する前提として，まず資本家の予想が及ばなければならない期間と範囲について詳細に考察する。

「こうした [投資が続く] 期間内に，彼の予想はまず第一に関係する価格変動に及ばなければならない。しかし，そうした予備知識は，価格変化をもたらす実物的変化を予見することなしにはほとんど認識されえない。……その変化の主な種類は，生産物需要の変化であり，その結果生じる生産物価格や生産要素価格の変化であり，また生産要素量の変化やそのために起こる生産要素価格の変化（両方の場合ともとくに利子率の変化を含む），そして最後に技術的知識の変化や発明などである。[20]」

そして，完全予見が成立するために必要とされる条件について次のように考察した。

「仮定されているのはただ，所与の時点で彼の投資に関係する全ての将来の変化は，彼にとって既知であるということである。……関係する期間の実質賃銀のみならず全ての価格について完全予見がもたれうる唯一の条件は，関連する期間に利用可能となる現在と将来の全ての商品が取引されるような単一市場において，全ての価格があらかじめ同時に実際に固定的となることである。このことは，その条件を満たすためには，人々が予見する期間が全ての個人にとって同一である必要があり，さらに遠い将来に起こりうる変化は全ての人々に対して周期的かつ同時に現わ

(19) [Morgenstern 1935 (1976)] pp.170-171.
(20) [Hayek 1935b (1939)] pp.96-97, 訳76頁.

れる，というもっと大きな困難をもたらす。[21]」

モルゲンシュテルンは「もし予見の完全性が達成されないようなやり方でその範囲が導入されるなら，その範囲はかなり厳密に述べられなければならない」と述べたが，ハイエクが資本家による完全予見が及ばなければならない範囲や完全予見が成立するための条件を苦心して考察していることは，両者の影響関係を表わしていると考えられるだろう。ハイエクは完全予見が成立するための条件を考察した後，「完全予見の仮定はいかに非現実的かを認識するためにのみ，こうした困難に注意するべきである」と述べている。

次にハイエクは「不変量の資本」という概念について考察する。均衡の安定条件とされている「純貯蓄と純投資の対応」という概念は，ある量的な意味で，資本が一定水準で維持されるという考えに依存しなければならない。それでは，現実的に資本財の価値が変化しているにもかかわらず，なぜ資本家たちは投資活動の適当な調整によって所有する資本の総価値を変化する前と全く同じ額に保とうとするのか。ハイエクは「予見できる変化への資本家の反応」と，「予見できない変化への資本家の反応」とに分けてこれを考察する。

「予見できる変化への資本家の反応」については，「資本の期待収益が増加すると期待される場合」と「資本の期待収益が減少すると期待される場合」に分け，それぞれを (1) 予測される変化が起こるまで以前と同じだけ支出し続ける資本家の所得流列，(2) 資本の貨幣価値を一定に保とうとして徐々に支出を増減させる資本家の所得流列，(3) 変化が予想されると即座に支出を増減させる資本家の所得流列の場合に分けて考察した。ハイエクは，(2) の可能性が一番高いとして，このようにして資本の貨幣価値が一定に保たれるとした。「予見できる変化への資本家の反応」とは，「完全予見をもつ資本家の反応」として説明された。

一方，「予見できない変化への資本家の反応」では，ハイエクは資本家の側の「完全予見の仮定を放棄し」，彼がすでに着手した投資から得られる収益に予想されざる変化が影響する場合，彼がそのとき以降の所得流列を一定に保ちたいなら，彼はどのように行動しなければならないかを考察している。

以上の考察により，ハイエクは「不変量の資本」という概念は，個々の資本家が主観的に将来を予見する範囲に依存せざるを得ないことを確認した。つまり，「資本ストック」という概念は，資本家が状況を「どれだけ正確に予見するか」に依存しており，また資本家の「予見」という概念がなければ意味をもたないものであるとされた。そして，「人間の予見は必ず非常に不完全であるという事実，また全ての経済活動は部分的には不正確であるような予想に基づかなければならない[22]」

(21) [Hayek 1935b (1939)] p.96n, 訳104頁.
(22) [Hayek 1935b (1939)] p.116, 訳90頁.

と述べている。

ハイエクが均衡理論に完全予見の想定や期待の要素を組み込むことの困難を認めるこの段階において，ハイエク知識論に変化が見られるのではないだろうか。つまり，第2節で示されたような，商業銀行による信用創造の結果，人々の予見や期待を撹乱する情報がもたらされるという限定された知識論の範囲を超えて，経済分析においても，主観的で不正確かもしれない人々の予見や期待の可能性を考慮せざるを得ないという知識論をハイエクが重視するようになったと考えることができる。伝統的な均衡分析における完全予見の想定に懐疑的になったことは，ハイエクが理論経済学において主観的な知識論を重視するようになったことを意味した。

4．「転換」点としての「経済学と知識」——景気循環論の研究計画（3）

ハイエクは「転換」点であるとされている「経済学と知識」(1936) において，均衡概念を定常状態の概念から完全に分離し，新しい均衡概念を定義した。それは，「様々な個人がもつ主観的な与件によってたてられた諸計画が相互に両立し，それが客観的な外的与件と一致している状態」であり，「均衡は一度到達されると，外的与件がこの社会の成員が共通してもつ諸期待と一致し続ける限り，継続するであろう」とされた。[23] そしてハイエクはこの新しい均衡概念を用いるならば，均衡分析は進歩する社会についても異時点間価格関係についても適用可能であるとした。[24]

モルゲンシュテルンに批判された第2節の「コペンハーゲン講義」(1933) の均衡概念は，この講義が1939年になって『利潤，利子，および投資』の中で出版される時，その部分に，「「経済学と知識」に関する論文の中で，均衡と予想との関係の議論を更に手を入れ部分的に改訂した」[25] という脚注が加えられた。部分的に改訂された均衡概念とは，この新しい均衡概念のことである。ハイエクは新しい均衡概念を定義した後，「以上の考察は近頃多少激しい論争の的となっている均衡と予見の関係について多くの光を投じるように見える。（注：特に，Oskar Morgenstern, “Vollkommene Voraussicht und Wirtschaftliches Gleichgewicht,” *Zeitschrift für Nationalökonomie*, Ⅳ, (1935), p.3. を参照せよ。）」[26] と述べている。そのことから，均衡概念の意味の限定は1935年のモルゲンシュテルンによるハイエク批判をふまえて行われたと考えることができる。

ハイエクは「経済学と知識」においては，「完全予見」という言葉を使わず，「ある瞬間において

---

(23) ［Hayek 1937 (1949)］p.41, 訳57頁．またハイエクは「経済学と知識」の中で，この定常的でない均衡概念については，［Hayek 1928 (1984)］の中で不満足な形ではあるが既に述べられているとしている。

(24) ハイエクはこの方面での研究を後に『資本の純粋理論』(1941) で行うことを予告している。この考察については次の研究に譲りたい。

(25) ［Hayek 1935a (1939)］p.140n, 訳122頁．

(26) ［Hayek 1937 (1949)］pp.41-42, 訳57頁．

均衡状態にある社会という概念によって我々が何を意味することができるのか」という観点から，「正確な予見（correct foresight）」を定義しようとした。ハイエクは次のように述べている。「[予見が] 正しいのは，すべての人の計画はどのような行為を他の人々が遂行しようとしているかという，まさに他人の行為に関する期待に基礎を置いているし，またこれら全ての計画は同じ一連の外的諸事実に関する期待に基づいているがゆえに，ある条件の下では誰も自分の計画を変更する理由をもたないであろうという意味においてであるに違いない。[27]」しかし「正確な予見」さえも，均衡状態を定義する特性としての意味しかもたなかった。

このような均衡概念の意味の限定から必然的に要請されることになるのが，「われわれが均衡状態に対して関心をもつことを正当化する理由」であった。ハイエクは，それは，ある条件下では社会の様々な成員の知識と意図は徐々に一致する方向に進む，つまり，「均衡に向かう傾向が存在する」という経験的な命題であるとした。ハイエクが「(a) この均衡へ向かう傾向を存在させる諸条件と，(b) 個々人の知識が変化させられる過程の性質とについて，我々にはまだほとんど何もわかっていない[28]」と述べていることは，ツァッピア [Zappia 1999] も述べているように「経済学と知識」における新しい研究計画の表明である。[29]

従って，この新しい均衡概念が達成される条件を探求する文脈において初めてハイエク知識論が強調された。彼は，均衡分析の形式的命題を現実社会の諸現象に適用するためには，「いかにして知識が獲得され伝達されるかについての諸想定」，「予見や予想についての諸想定」によって検証する必要があると主張した。ここで彼は「価格の期待と現在の価格についての知識は，私が理解する知識の問題のほんの小さい一部門でしかない[30]」と述べていることから，第2節の研究計画が否定されていることがわかる。均衡が実現されるために人々が持っていなければならない「関連ある知識」とは，「なぜ様々な人々に与えられる主観的な与件が客観的な事実と一致するのかという一般的な問題である」とした。つまり，「関連ある知識」とは，「人がそれを偶然に獲得した場合に彼にとって有用であり，彼の計画に変更をもたらすであろうような知識の全部ではない[31]」のである。均

---

(27) [Hayek 1937 (1949)] p.42, 訳57-58頁.

(28) [Hayek 1937 (1949)] p.45, 訳60頁.

(29) ハイエクのこの新しい研究計画は，社会の成員の諸計画，諸期待が外的与件と一致する均衡状態を否定せず，それが達成されるための動態的な過程に関心をもつようになったものといえるので，第2節で示された研究計画 (2) と完全に断絶しているかどうかは議論の余地がある。

なお，その後「社会における知識の利用」[Hayek 1945 (1949)] に見られる，知識が絶えず伝達され，獲得される過程として，価格というシンボルに情報を集約する価格メカニズムを利用すべきであるという主張から自生的秩序論が展開していくのであるが，デサイ，ドンゼッリ，コットレルらによると，それはハイエクが「経済学と知識」における新たな研究計画を放棄したことを意味すると解釈されている。筆者も，ハイエクは「経済学と知識」で自分がたてた問題に後に答えていないことに注目すべきであると考える。

(30) [Hayek 1937 (1949)] p.51, 訳67頁.

衡が実現されるためには知識がある程度制約されている必要があることを主張しているのである。

しかし，「経済学と知識」におけるハイエクの知識論の主張には二面性がある。ハイエクは知識論を均衡分析の範囲でのみ考察すべきものとはしなかった。「もし知識のその他の変化は通常の意味における「与件の変化」として，均衡分析の領域外に属するものとみなされねばならないものであるとしたならば，このことは均衡分析がそのような知識における変化の意義について我々にまったく何も教えることができない[32]」として，広告のような知識の交流を目的とする制度の意義について言及しているのである。

5．結論

ハイエクの景気循環論研究が彼の理論経済学から社会哲学へ研究領域の「転換」をもたらしたという立場をとるとき，ハイエクへのミュルダールからの影響は，両者を批判したモルゲンシュテルンからの影響と共に考慮されるべきである。ハイエクの「転換」プロセスは，彼が景気循環論研究の過程で生じた，経済分析に伴う知識論についての見解を従来の理論経済学の範囲を超えて追求しようとしたことであるとして，次のように説明できる。

初期ハイエクの定常的均衡概念にもとづいた景気循環論研究はミュルダールによって批判され，ミュルダールの見解を受け入れたハイエクは，均衡分析に期待や予見の要素を組み込んで再定式化するという研究計画を立てた。しかし均衡分析に完全予見の想定を組み込むことの難点などを認識していく過程で，完全予見の想定の論理矛盾を指摘するモルゲンシュテルン論文に，今までの研究計画に決定的に断念を迫る見解を見出した。そして伝統的な均衡分析における完全予見の想定の成立に懐疑的になったことは，ハイエクが理論経済学において主観的な知識論を重視するようになったことを意味した。「経済学と知識」における「転換」は，新しい均衡概念の規定による景気循環論の新たな研究計画の設定と，経済学における知識の問題の強調という出発点であった。

「経済学と知識」に二つの知識論が示されていることは，「転換」に至るプロセスにおいて，ハイエクが完全予見が成立する場合としない場合とに分けて考察し続けてきたことからも理解できる。それらは「転換」後，『資本の純粋理論』[Hayek 1941] での「新しい均衡概念」にもとづく異時点間均衡分析に向かう方向と，社会哲学的な自生的秩序論の制度的分析に向かう方向とにつながったと考えられる。

（経済学研究科後期博士課程）

---

(31) [Hayek 1937 (1949)] p.53, 訳69頁.
(32) [Hayek 1937 (1949)] p.55, 訳70頁.

参 考 文 献

Barry, Norman P. 1979 *Hayek's Social and Economic Philosophy*, The Macmillan Press, London. 矢島鈞次訳『ハイエクの社会・経済哲学』春秋社, 1984.

Caldwell, Bruce J. 1988 "Hayek's Transformation," *History of Political Economy*, Vol.20, No.4.

—— 1992 "Hayek the Falsificationist? : A Refutation," *Research in the History of Economic Thought and Methodology*, Vol.10.

—— 1994 "Four Theses on Hayek," in Colonna, M. et al. (eds.), *Capitalism, Socialism and Knowledge : The Economics of F. A. Hayek*, Vol.II, Edward Elgar, Hants : England and Vermont : U.S.A., 1994.

Cottrell, Allin 1993 "Lucas and Austrians, Review Essay on Rudy van Zijp, Austrian and New Classical Business Cycle Theories," *History of Economics Review*, No.20.

Desai, Meghnad 1994 "Equilibrium, Expectations and Knowledge," in Birner, J. and Rudy van Zijp (eds.), *Hayek, Co-ordination and Evolution*, Routledge, London and New York.

Donzelli, Franco 1993a "Friedrich August von Hayek (1899-1992)," *Rivista Internazionale di Scienze e Commerciali*, Vol.40, No.1.

—— 1993b "The Influence of the Socialist Calculation Debate on Hayek's View of General Equilibrium Theory," *Revue européenne des sciences sociales*, Vol.31, No.96.

Foss, Nicolai Juul 1995 "More on 'Hayek's Transformation'," *History of Political Economy*, Vol.27, No.2.

Gray, John 1984 *Hayek on Liberty*, Basil Blackwell, Oxford. 照屋佳男, 古賀勝次郎訳『ハイエクの自由論』行人社, 1985.

Hayek, Friedrich August 1928 "Das Intertemporale Gleichgewichtssystem der Preise und die Bewegungen des 'Geldwertes'," *Weltwirtschaftliches Archiv*, No.2, English translation, "Intertemporal Price Equilibrium and Movements in the Value of Money," in Hayek 1984.

—— 1929 *Geldtheorie und Konjunkturtheorie*, Hölder-Pichler-Tempsky, Wien und Leipzig, 古賀勝次郎他訳『ハイエク全集1』春秋社, 1988.

—— 1931 *Prices and Production*, Routledge & Kegan Paul, London. 古賀勝次郎他訳『ハイエク全集1』春秋社, 1988.

—— (ed.) 1933 *Beiträge zur Geldtheorie*, Julius Springer, Vienna.

—— 1935a "Preiserwartungen, Monetäre Störungen und Fehlinvestitionen," *Nationalökonomisk Tidsskrift*, Vol.73, No.3, English translation, "Price Expectations, Monetary Disturbance and Malinvestments," in Hayek 1939.

—— 1935b "The Maintenance of Capital," *Economica*, N.S.2, August, in Hayek 1939.

—— (ed.) 1935c *Collectivist Economic Planning*, George Routledge & Sons, London.

—— 1937 "Economics and Knowledge," *Economica*, N.S.4, in Hayek 1949.

—— 1939 *Profits, Interest and Investment and Other Essays on the Theory of Industrial Fluctuations*, Routledge and Kegan Paul, London. 加藤寛他訳『ハイエク全集2』春秋社, 1992.

—— 1941 *The Pure Theory of Capital*, Macmillan, London. 一谷藤一郎訳『資本の純粋理論』実業之日本社, 1952.

—— 1945 "The Use of Knowledge in Society," *American Economic Review*, Vol.35, No.4, in Hayek 1949.

—— 1946 "The Meaning of Competition," The Stafford Little Lecture at Princeton University, in Hayek 1949.

—— 1949 *Individualism and Economic Order*, Routledge & Kegan Paul, London. 嘉治元郎, 嘉治佐

代訳『ハイエク全集3』春秋社，1990.
—— 1965 "Kinds of Rationalism," *The Economic Studies Quarterly*, Vol.15, No.3, in Hayek 1967.
—— 1967 *Studies in Philosophy, Politics and Economics*, Routledge & Kegan Paul, London.
—— 1968 "Competition as a Discovery Procedure," a lecture delivered to The Philadelphia Society at Chicago, in Hayek 1978.
—— 1978 *New Studies in Philosophy, Economics and the History of Ideas*, University of Chicago Press, Chicago.
—— 1984 *Money, Capital & Fluctuations : Early Essays*, Routledge & Kegan Paul, London.
Hutchison, Terence W. 1981 *The Politics and Philosophy of Economics : Marxians, Keynesians and Austrians*, Blackwell, Oxford.
Kaldor, Nicholas 1934 "The Determinateness of Static Equilibrium," in Kaldor, *Essays on Value and Distribution*, Gerald Duckworth, London, 1960.
Kirzner, Israel M. 1992 *The Meaning of Market Process*, Routledge, London and New York.
Lavoie, Don 1985a *Rivalry and Central Planning*, Cambridge University Press, Cambridge. 吉田靖彦訳『社会主義計算論争再考』青山社，1999.
—— 1985b *National Economic Planning : What is Left?*, Ballinger Publishing Company, Cambridge : Massachusetts.
—— 1991 "The Market as a Procedure for Discovery and Conveyance of Inarticulate Knowledge," in Wood, J. C. and R. N. Woods (eds.), *Friedrich A. Hayek Critical Assessments*, Vol.Ⅳ, Routledge, London and New York.
Morgenstern, Oskar 1928 *Wirtschaftsprognose : Eine Untersuchung Ihrer Voraussetungen und Möglichkeiten*, Julius Springer, Wien.
—— 1935 "Vollkommene Voraussicht und Wirtschaftliches Gleichgewicht," *Zeitschrift für Nationalökonomie*, Vol.6, Part 3, August, English translation, "Perfect Foresight and Economic Equilibrium," in Schotter and Nadiri 1976.
Myrdal, Gunnar 1933 "Gleichgewichtsbegriff als Instrument der Geldtheoretischen Analyse," in Hayek 1933.
—— 1939 *Monetary Equilibrium*, William Hodge, London. 傍島省三訳『貨幣的均衡論』実業之日本社，1943.
O'Driscoll, Gerald P., Jr. 1977 *Economics as a Coordination Problem : The Contributions of Friedrich Hayek*, Sheed Andrews and McMeel, Kansas City.
O'Driscoll, Gerald P., Jr. and Mario J. Rizzo 1985 *The Economics of Time and Ignorance*, New York, Basil Blackwell. 橋本努他訳『時間と無知の経済学——ネオ・オーストリア学派宣言——』勁草書房，1999.
Schotter, Andrew and M. Ishaq Nadiri (eds.) 1976 *Selected Economic Writings of Oskar Morgenstern*, New York University Press, New York.
Steele, G. R. 2001 *Keynes and Hayek : The Money Economy*, Routledge, London and New York.
Trautwein, Hans-Michael 1994 "Hayek's Double Failure in Business Cycle Theory : A Note," in Colonna, M. and H. Hagemann (eds.), *Money and Business Cycles : The Economics of F. A. Hayek*, Vol. I , Edward Elgar, Hants : England and Vermont : USA, 1994.
Zappia, Carlo 1996 "The Notion of Private Information in a Modern Perspective : A Reappraisal of Hayek's Contribution," *The European Journal of the History of Economic Thought*, 3 : 1.
—— 1997 "Private Information, Contractual Arrangements and Hayek's Knowledge Problem," in Keizer W. et al. (eds.), *Austrian Economics in Debate : Studies in the History of Economics*, Vol. 12, Routledge, London and New York.

—— 1999 "The Assumption of Perfect Foresight and Hayek's Theory of Knowledge," *Revue d'économie politique*, Vol.109, No.6.
江頭進　1999 『F.A.ハイエクの研究』日本経済評論社.
古賀勝次郎　1981 『ハイエクの政治経済学』新評論.
—— 1983 『ハイエクと新自由主義』行人社.
橋本努　1991 「ハイエクの迷宮——方法論的転換問題——」『現代思想』19 (12).
—— 1994 『自由の論法——ポパー・ミーゼス・ハイエク——』創文社.
八木紀一郎　1988 『オーストリア経済思想史研究——中欧帝国と経済学者——』名古屋大学出版会.